

「簡単な価値形態」の論理 (その1)

川崎 誠

はじめに

本稿は先に発表した拙稿「『商品の二要因』論の論理」(本月報 475号所収[2003.1])および「『労働の二重性』論の論理」(同 483号所収[2003.9])^(注)に続く稿として、『資本論』商品章第三節「価値形態または交換価値」の「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」について、ただし紙幅の都合で「1 価値表現の両極」および「2 相対的価値形態」に限り、その論理の展開を辿るものである。「3 等価形態」と「4 簡単な価値形態の全体」については「その2」に回し、さらに「B 全体的な、または展開された価値形態」以下の諸形態については稿を改めて論じたい。

使用した『資本論』の邦訳テキストは、新日本出版社刊『資本論』(全13分冊。資本論翻訳委員会訳)の第一分冊である。また参照する『大論理学』の頁数は岩波全集版(全四巻、武市健人訳)のそれである - 以下では上巻の一を、同二を、中巻を、下巻を と略記する - 。『大論理学』について

目次

はじめに	1
A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態	2
1 価値表現の両極 - 相対的価値形態と等価形態	2
2 相対的価値形態	9
a 相対的価値形態の内実	9
b 相対的価値形態の量的規定性	23
編集後記	30

(注) これらの稿に含まれる読み誤りについては、時宜を得て修正を施すつもりである。

は適宜以文社刊（寺澤恒信訳）の第二巻をも参照し、『資本論』初版の邦訳は幻燈社書店刊（江夏美千穂訳）を用いた。ただし何れの邦訳書も適宜訳文を変えた場合がある。

各パラグラフのはじめに『資本論』と『大論理学』との対応を

(1) p.82 第二章本質態または反省規定の第一パラグラフ p.32

のように示す。矢印の左は『資本論』のパラグラフ番号と邦訳テキストの頁数である。第三節は小節以下の区切りをもつのでパラグラフ番号もそれに依りて付してある。矢印の右は、『資本論』の叙述に直接対応する『大論理学』邦訳テキストの巻数・標題・頁数である。標題はヘーゲル自身によるものの他に、岩波版訳者によるものをも含んでいる。

A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態

1 価値表現の両極 - 相対的価値形態と等価形態

(1) p.82 第二章本質態または反省規定 p.32

全ての価値形態の秘密は、この簡単な [単純な・単一な] 価値形態 einfache Wertform の内に潜んでいる。だから、この価値形態の分析には真の困難がある。

「商品の価値対象性は、どうつかまえたらいいか分からないことによって、寡婦のクィックリーと区別される」(p.81)と本節前書きにマルクスは書いていた - 第三節の叙述は初版におけるその該当部分を大幅に改訂して成っている。初版における章節の区分は現行版と異なっており、現行版第三節に該当する記述は独立の節をなしていない。現行版ではまた初版には見られない叙述があり、その内容は第一節・第二節の簡潔な要約と以降の展望が中心をなしている。この部分を第三節の「前書き」と呼んでおく - 。商品の自然形態(「商品体の感性的にがさがさした対象性」(同))と対比しての、価値の超自然性・社会性の指摘である。

はじめに本稿の範囲における論理の展開を概観しておこう。前稿考察した「第二節商品に表わされる労働の二重性」の論理は『大論理学』の仮象論に対応するが、その仮象論は「第二巻本質論 第一篇自己自身における反省としての本質」 - 因みに、第一巻は有論(存在論)、第三巻は概念論であり、また本質論は「第二篇現象」「第三篇現実性」と続く - の第一章に位置していた。そこで「第三節価値形態または交換価値」の全体が対応するのは「第二章本質態または反省規定」と「第三章根拠」であり - なお「第四節商品の物神的性格とその秘密」は「第二篇現象 第一章実存」に対応し、ここまですべて商品章の対応する部分である - 、そのうち「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」だけが第二章に対応する。前節では商品がそれを生産する労働の面から把握され、その労働は論理的には反省する運動であった。そして完全な反省であるところの規定的反省すなわち反省規定において、本質 - それは止揚された有である - は本質態として措定される。つまり止揚された有としてまだ有的なものを残していた本質が、反省運動の措定的反省から外的反省を経て規

定的反省に到る行程 *Bewegung* を通して「(他ならぬ)自己自身における反省としての本質」になるのである。ただし『大論理学』第二章の標題が *Die Wesenheiten oder die Reflexionsbestimmungen* と複数形であるように、本質態は本質ではない。この点を以文社版訳者は次のように注している。

単一的・統一的である本質(本質そのもの)に対して、規定されることによって(規定の仕方はさまざまでありうるから)複数的になったものが「本質態」と呼ばれるのである。規定されることによって固定され、本質のもっている運動という性格が失われて、自己への反省という性格が前面にでたものが「本質態」である。(p.300) - なお *Wesenheit* の二類の訳語「本質性」と「本質態」については、同訳書第一巻の「訳者のまえがき」を参照。 -

つまり或る商品の簡単な価値形態とは、その自然形態 *Naturalform* に対するところの本質態であり、それ故労働(反省)の運動性格が止揚されて(止揚態 *Aufgehobensein*)、「 x 量の商品A = y 量の商品B」の等式に表わされるところの自己への反省という性格が前面に出た、そのような本質である。それは自らの矛盾によってその根拠たる全体的な価値形態さらに一般的価値形態へと進んで行く。

マルクスは「全ての価値形態の秘密は、この簡単な価値形態のうちに潜んでいる」と言う。「潜んでいる *stcken*」とは含まれているということだが、反省運動(労働)とは本質が自己自身を反省して自己を開示する運動であるから、その完成態である規定的反省すなわち「規定された反省」(p.32)に含まれて自己開示するのはそのような本質、つまりそのように「規定された本質 *bestimmtes Wesen*」(同)である。そしてこの規定された本質が本質態である。ヘーゲルはこれに次の説明を与える。

反省は本質が自己自身において仮象[映現]する運動 *das Scheinen des Wesens in sich selbst* である。自己への無限の還帰としての本質は直接的な単一態 *Einfachheit* ではなくて否定的な単一態である。本質は区別された諸契機 *unterschiedene Momente* を通じての運動であり、自己との絶対的な媒介 *absolute Vermittlung mit sich* である。しかし本質はそれのこれらの契機へと仮象する。だからこれらの契機はそれ自身が自己へと反省した *in sich reflektiert* 諸規定である。(同)

簡単な価値形態は反省「SはPである」で表わされ - 「反省諸規定は一般に命題の形式で表わされる」(p.32 註釈) - 、その反省は本質の自己自身において仮象する運動である。この反省において、本質(商品価値)は無限の自己運動 - 「自己への無限な関係」(p.31 第一章「3 規定的反省」) - として、直接的な単一態ではなくて否定的な単一態である。つまり価値は区別された諸契機(S・P)を通じて自己自身になる。「価値形態の分析の困難」はこの運動の把握の困難であり、価値が自己の各契機に仮象し、それ故各契機がそれ自身反省規定であることを把握することの難しさである。或いはこう言ってもよい。S・Pがそれ自身反省規定なのだから反省「SはPである」は四肢構造であるが、一般的に言っても四肢構造の把握は易しいことではない。

そこでヘーゲルの説く反省規定論のあらましを引いておこう。

本質は先ず第一に、自己自身への単一な関係 *einfache Beziehung auf sich selbst* であり、純粋な同一性 *reine Identität* である。この自己自身への単一な関係ということが本質の規定であるが、この規定によれば本質はむしろ没規定態である。／第二に、本来の *eigentlich* 規定は区別 *Unterschied* である。それは一方では外的或いは無関心的な区別として差異性一般 *Verschiedenheit überhaupt* であるが、他方では対立した差異性、すなわち対立 *Gegensatz* である。

／第三に、対立は矛盾という形で自己自身へと反省し、従ってその根拠に還帰する。(p.32) 本稿の範囲は上述のように同一性と区別であるが、それぞれが反省規定の即自的・向自的な把握であることは言うまでもない(矛盾は即且向自的である)。同一性は自己自身への単一な関係として「AはAである」と表わされるが、ここでは二契機が区別されて当の形式が成り立つのだから、「AはAである」は実は「Aは、非Aではなくて、Aである」でなければならない。この非A(以下Bで代表させる)が顕在して区別「AはBでない」である。けれどもAとBの区別は、両者が互に区別され得るもの・或る点で同じものである限りにおいて成り立つから、「AはBでない」は「Aは、A(=B)であって、Bでない」であり、つまり同一性「AはAである」と区別「AはBでない」が区別の二契機である。この区別がどのように進行するかは後述する。

(2) p.83 A同一性 [1.同一性] の第一パラグラフ p.35

ここでは、種類を異にする [差異される種類の] *verschiedenartig* 二つの商品AとB、我々の例ではリンネルと上着とは、明らかに、二つの異なった [差異された] 役割 *zwei verschiedene Rollen* を演じている。リンネルはその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料 *Material* として役立っている。第一の商品は能動的 *aktiv* 役割を演じ、第二の商品は受動的 *passiv* 役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値 *relativer Wert* として表わされている。すなわち、この商品は相対的価値形態 *relative Wertform* にある。第二の商品は等価物 *Aquivalent* として機能する。すなわち、等価形態 *Aquivalentform* にある。

本質は止揚された直接態としての単一な [単純な] 直接態である (p.35)。止揚された直接態とは否定態であり、本質の否定態は有 *Sein* であるから、本質の否定態は本質の有(存在)である。つまり本質はその絶対的否定態において自己自身と同等 *sich selbst gleich* であり、だから本質はその否定態によって他在 *Anderssein* と他者への関係 *Beziehung auf Anderes* とが端的にそれ自身のもとで消滅し *an sich selbst verschwinden*、純粋な自己同等性 *reine Sichselbstgleichheit* になっている。かくして本質は単一な自己との同一性 *einfache Identität mit sich* である。

「二つの商品の価値関係 *Wertverhältnis* は、一つの商品にとっての最も簡単な価値表現を与え」

(p.82 第三節前書き) 表現される価値がその商品の本質である。「x 量の商品 A = y 量の商品 B」においては商品 A (「我々の例ではリンネル」) の価値が商品 B (同じく「上着」) で表現され、つまりリンネルの価値が本質として単一な直接態である。他方「上着はこの価値表現の材料」として本質の否定態・本質の有である。この価値関係においてリンネルは、上着を使って他と他者関係を消滅させる「能動的役割」である。これに対して利用される上着は受動的な役割である。リンネル価値は純粋な自己同等性すなわち (他に無關心な) 自らにおける同等性であるが、上着を「等価物」すなわち自己同一性 (自己 = 本質との同一性) にもっているから即且向自的ではなく、この意味で「相対的価値として表わされている」。

(3) p.83 A 同一性 [1. 同一性] の第二・三パラグラフ p.35~36

相対的価値形態と等価形態とは、同じ [同一の] derselbe 価値表現の、互いに依存し合い、互いに制約し合う、不可分の契機 zu einander gehorige, sich wechselsetig bedingende, unzertrennliche Momente であるが、同時に、互いに排除し合う、或いは対立し合う entgegengesetzt、両極端 Extreme、すなわち両極 Pole である。それらは、つねに、この価値表現によって互に関連させられる [二つの] 異なった [差異された] 商品に配分される。私は、例えば、リンネルの価値をリンネルで表現することはできない。20 エレのリンネル = 20 エレのリンネル は、決して価値表現ではない。この等式が語るのはむしろ逆に、二〇エレのリンネルは二〇エレのリンネル、すなわち一定分量の ein bestimmtes Quantum 使用対象であるリンネル、以外の何ものでもないということである。従って、リンネルの価値は、ただ相対的に、すなわち他の商品でしか、表現され得ない。それ故、リンネルの相対的価値形態は、何か或る他の商品がリンネルに相対して等価形態にあることを前提する。他面、等価物の役をつとめるこの他の商品は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それは自分の価値を表現するのではない。それは、他の商品の価値表現に材料を提供するだけである。

本質の自己同一性は反省の直接態である (p.35)。それは有の領域における、有であったり無であったりするところの自己同等性 Gleichheit mit sich でなく、自己を統一 Einheit にまで回復する herstellen ものとしての自己同等性である。それは或る他者からの回復でなく、自己の中からの、または自己の中への純粋な回復である。すなわち本質的な同一性 wesentliche Identität である。本質的な同一性は抽象的な同一性ではない (p.36)。それはその同一性の外部において行なわれる相対的な否定作用 - すなわち、区別されたもの das Unterschiedene をただ同一性と分離し、それを有的なもの [存在するもの] として als seiend そのまま同一性の外に放っておくといった相対的否定作用 - によって生じたのではない。むしろ有と有のあらゆる規定態 (質) とが、相対的にではなくそれ自体におい

て an sich selbst 止揚されており、有それ自体 Sein an sich におけるこの単一な否定態が同一性そのもの Identität selbst なのである。

価値は自己同等性であるが、統一すなわち「x 量の商品 A = y 量の商品 B」で表現される本質的な同一性であるから、相対的価値形態と等価形態はただ区別されたものとして同一性の外に放っておかれることはない。二商品の有と有の規定態(質)はそれ自身において止揚され(否定され)、二商品は単一な否定態として同一性そのもの(「AはAである」)である。だから相対的価値形態と等価形態(AとA)は「同じ価値表現の、互いに依存し合い、互いに制約し合う、不可分の契機である」が、「同時に、(否定態として)互いに排除し合う、あるいは対立し合う、両極端、すなわち両極である」。

有のそれ自体における単一な否定態が同一性そのものである限り、この同一性は(有の否定として)まだ本質と同一のものである(p.36)。けれども、「外的反省以外の思惟を知らないような思惟」(p.36 註釈1)はかかる同一性または同一性と同じものである本質を認識し得ず、それ故抽象的な同一性・区別と並立される daneben 同一性だけを見る。これは私念[憶見] Meinung すなわち事実的な historisch 思惟であって論理的 logisch ではない。それ故「20 エレのリンネル = 20 エレのリンネル」を、その「AはAである」の形式から価値表現と解するのは論理的な思惟ではない。同一性の本質的な規定として同一律と排中律だけを認める没思想 gedankenlos は事実的な思惟だからである(p.32 註釈)。或る商品の価値が「ただ相対的に、すなわち他の商品でしか、表現され得ない」という把握だけが論理的であり得る。

(4) p.84 A 同一性 [2. 絶対的区別] の第一・二パラグラフ p.37~38

確かに、20 エレのリンネル = 1 着の上着 すなわち、20 エレのリンネルは一着の上着に値する、という表現は、1 着の上着 = 20 エレのリンネル すなわち、一着の上着は20 エレのリンネルに値する、という逆の関連を含んでいる。しかし、そうは言っても、上着の価値を相対的に表現するためには、私はやはりこの等式を逆にしなければならず、そしてそうするや否や、上着ではなくリンネルが等価物となる。従って、同じ商品は同じ価値表現においては同時に両方の形態で現われることはできない。この両形態は、むしろ対極的に排除し合うのである sich polarisch ausschliessen。

算術の等式においては両辺を取り替えても表現される内容は変わらないが - 「 $3 * 5 = 15$ 」と「 $15 = 3 * 5$ 」 - 、価値関係の等式の場合は「20 エレのリンネル = 1 着の上着」と「1 着の上着 = 20 エレのリンネル」とでは式の表現内容が変わってしまう。何故か。

同一性は最初は本質そのもの Wesen selbst (単一的である本質)であって、まだ本質の規定ではな

い (p.37) それは反省の全体 ganze Reflexion (全体としての同一性)であって、他の契機と区別された反省の一契機 (契機としての同一性)ではない - 同一性は抽象的同一性ではないから区別は外在せずに内に含まれ、それ故同一性は自己内反省するところの即自的な同一性すなわち我々にとっての für uns 同一性である。この即自が対自化 [向自化]され (für es)、同一性が区別と共に指定されて (被指定有) 自らの契機になり、それは反省規定である。それ故本質そのものの仮象を説くのが今後の課題である - 。同一性は絶対的な否定として、自己自身を直接的に [非媒介的に] unmittelbar 否定する否定である。(自己自身の否定であるから) それは一つの非有 Nichtsein であり、(同一性の非有すなわち区別が同一性においてあるのだから) その成立と同時に消滅しているような区別である。或いは、同一性は (その非有すなわち) 一つの区別する運動 ein Unterscheiden であるが、それは何ものをも区別せず、直ちに自己自身の中に崩壊する zusammenfallen ような区別する運動である。つまり区別する運動は (区別が崩壊して) 他者の非有としての非有を指定する運動 das Setzen des Nichtseins als das Nichtsein des Anderen である。しかし他者の非有は他者の止揚であるから、そこでは区別する運動そのもの das Unterscheiden selbst が止揚されている。同一性 (等式) がかく把握されて、このとき「逆の関連」すなわち両項を取り替えた逆の等式は元の等式に含まれる。「 $3 * 5$ 」と「 15 」を区別する運動は等式の中で止揚されているからである。

けれども区別する運動は、(止揚されて無に帰するのではなく、止揚されたものは媒介されたものであるから) ここでは (本質そのものから本質規定へ移行しつつあるここでは) 自己に関係する否定態として、(他者の非有ではなく) 自己自身の非有であるような非有として存在する vorhanden (p.37)。すなわち非有は、自己の非有を他者においてでなく、自己自身においてもっている - 区別する運動が指定されている - 。それ故自己に関係する区別・反省した区別 reflektierter Unterschied が存在する。すなわち純粋な絶対的区別 reiner, absoluter Unterschied である (「Aは非Aではない」或いは「AはBではない」)。

「 $3 * 5 = 15$ 」の両項「 $3 * 5$ 」「 15 」が定量 Quantum であるのに対し、「 20 エレのリンネル = 1 着の上着」の「 20 エレのリンネル」「 1 着の上着」は度量 Mas (質的量) であった (第一節)。つまり「 20 エレのリンネル」「 1 着の上着」は、等置されて相手を自己自身の非有としてもっており、相手 (自己の非有) が自己自身であった (拙稿『『商品の二要因』論の論理』 p.14) それ故等式「 20 エレのリンネル = 1 着の上着」は純粋な絶対的区別であり、逆の等式「 1 着の上着 = 20 エレのリンネル」(自己の非有) を自己自身においてもっている。「 20 エレのリンネル = 1 着の上着」と「 1 着の上着 = 20 エレのリンネル」との区別が存在する [現前する] vorhanden のである。区別が存在する以上、「上着の価値を相対的に表現するためには……この等式を逆にしなければならない」。

かくして同一性 (「AはAである」) は自己自身への反省 Reflexion in sich selbst (「Aは、非Aではなくて、Aである」) であるが、それは内的な反撥 [(Aの非Aを) 突き放す運動] das innerliche Abstosen という意味でのみ自己内反省 Reflexion-in-sich であり、(突き放すことで) 自己を直ちに自己の中へ取り戻

す sich in sich zurucknehmend 突き放す運動である (p.38)。従ってこの同一性は自己と同一的な区別 (「AはAである」)としての同一性である。けれども区別は、それが同一性ではなくて、絶対的な非同一性 absolute Nichtidentität (「Aは非Aではない」)である限りにおいてのみ自己と同一的である

－ 同一性 (「AはAである」)と区別 (「AはBではない」)の区別が指定され、同一性は「契機としての同一性」になった。－。また非同一性も、それが他者を少しも含まず、ただ自己自身だけを含む限り、換言すれば絶対的な自己同一性である限りにおいてのみ絶対的 (非同一性)である。－ 「絶対的」の意味について、以文社訳者の注を参照する。「反省する運動は、自己から出て、他者につきあたり、自己へと帰る運動であるから、その限りで他者を含んでいる。したがって『その他者をいささかも含まず自己自身だけを含む』ということは、このような反省する運動が揚棄されていることを意味する。同一性が自己から出て自己へと帰る運動が、運動としての限りでは揚棄され、この運動の帰結だけが残される場合に、そこにえられるものが『絶対的同一性』である。また、非同一性とは区別にほかならないから、区別が自己から出て自己へと帰る運動が、運動としての限りで揚棄されるならば、『区別は区別である』ということ・すなわち区別の自己との絶対的同一性が残るが、この残ったものが『絶対的区別 (= 絶対的 非同一性)』である。こうしてここでの『絶対的』ということとは、反省する運動そのものが揚棄され、反省する運動のなかに現われる契機が固定され、固執されていることを意味している。」(訳者注 p.307) －

「20 エレのリンネル = 1 着の上着」(「全体としての同一性」)は内的に反撥し、相対的価値形態と等価形態は「同じ価値表現」において区別される。だから「同じ商品は同じ価値表現においては同時に両方の形態で現われることはできない」。換言すれば或る商品が当の「同じ商品」であるのは「同じ価値表現」の一方の形態である限りのことであり、従ってここで一方の形態 (同一性)は「契機としての同一性」である。反省運動は今止揚されており、固定された両契機すなわち「(相対的価値形態・等価形態の)両形態は、対極的に排除し合う」。

(5) p.84 A 同一性 [2. 絶対的区別] の第三パラグラフ p.38

そこで、或る一つの商品が相対的価値形態にある sich befinden か、それと対立する等価形態にあるかは、もっぱら、価値表現におけるその商品のそのつどの位置 Stelle - すなわち、その商品は、その価値が表現される商品なのか、それをもって価値が表現される商品なのか - にかかっている abhängen。

絶対的な自己同一性が絶対的非同一性なのだから (前パラグラフ)、同一性はそれ自身において an ihr selbst 絶対的非同一性である (p.38)。しかし、それはまた非同一性 (区別) に対立する同一性という (反省) 規定でもある。同一性は自己内反省 (「AはAである」) として、自己を自己自身の [固有の] 非有として指定するからである。つまり同一性は (自ら絶対的非同一性なのだから) 全体 das Ganze (本質そのもの) であるが、また反省として自己を自己自身の契機として、同一性がそこから

自己へと還帰するところの被指定有 *Gesetzsein* (非同一性に対立する同一性) として指定する。かくして同一性は、自己 (全体としての同一性) の契機としてはじめて、絶対的区別 (契機としての区別) に対立する・単一な自己同等性という (反省) 規定としての同一性そのもの *Identität als solche als Bestimmung* (契機としての同一性) である - 反省規定は自己内反省と被指定有を二契機にもつが (以文社版 p.305 訳者注) 同一性についてこのことが確認され (自ら非同一性であると反省する同一性と非同一性に対立する同一性) 本質そのものとしての同一性から反省規定としての同一性が導かれた - 。

「価値関係」は同一性としてそれ自身において絶対的非同一性であるが、また自己内反省として (契機としての) 同一性 (相対的価値形態) を指定し、かくしてそれは契機としての区別 (等価形態) に対立する。「20 エレのリンネル = 1 着の上着 (20 エレのリンネルは 1 着の上着に値する)」を「20 エレのリンネルは 1 着の上着である」と示せば、被指定有「(1 着の上着である) 20 エレのリンネル」は相対的価値形態にあって「1 着の上着である」というように「その価値が表現され」、他方「それでもって価値が表現される」ところの 1 着の上着は同一性に対立するところの絶対的区別すなわち等価形態にある。

2 相対的価値形態

a 相対的価値形態の内実

(1) p.84 B 区別 1 絶対的区別 p.44

或る一つの商品の簡単な価値表現 *einfacher Wertausdruck* が二つの商品の価値関係のうちどのように潜んでいるかをみつけ出すためには、この価値関係を、さしあたりその量的関係 [側面] *seiner quantitative Seite* から全く独立に *unabhängig*、考察しなければならない。人は、たいてい、これと正反対のことを行っており、価値関係のうち、二種類の商品の一定分量 *bestimmte Quanta* どうしが等しいとされる *gleichgelten* 割合 [比率] *Proportion* だけを見ている。その場合、見落とされているのは、異なった [差異された] *verschieden* 物の大きさは、それらが同じ単位 (統一性) *dieselbe Einheit* に還元 *Reduktion* されてはじめて、量的に比較され得る *vergleichbar* ものとなるということである。それらは、同じ単位の諸表現 *Ausdrücke derselben Einheit* としてのみ、同名の、それ故同じ単位で計量され得る大きさ *kommensurable Größen* なのである。

量の側面をさしあたり問題にしないという論法は前節十パラグラフでも見られ、そこでは次のように説かれていた。

我々の想定によれば、上着はリンネルの二倍の価値をもっている。もっとも、これは量的な区別 *ein quantitativer Unterschied* にすぎず、この区別はさしあたりまだ我々の問題ではない。

そこで、我々は、一着の上着の価値が一〇エレのリンネルの価値の二倍であれば、二〇エレのリンネルは一着の上着と同じ価値の大きさ Wertgröße をもつということを思い出そう。価値としては、上着とリンネルとは同じ実体 gleiche Substanz をもつ物であり、同種の労働の客観的表現である。云々 (p.74)

見ての通り、論理の進行は本節のそれに通う。「上着がリンネルの二倍の価値をもっている」ということは上着の価値とリンネルの価値の「割合」を示しており、つまりこの「価値関係の量的側面」に他ならない。価値関係と言えは直ちにこの量的側面(量的関係[量的比例] quantitatives Verhältnis)に向かうのが一般の立場である。これに対してマルクスが「一着の上着の価値が一〇エレのリンネルの価値の二倍であれば、二〇エレのリンネルは一着の上着と同じ価値の大きさをもつということを思い出す」とき、量的関係の考察(それは「b 相対的価値形態の量的規定性」でなされる)に先立って、「差異された物の大きさが、同じ単位に還元される」(「価値としては、上着とリンネルとは同じ実体 gleiche Substanz をもつ」)ことが把握される。ただし本節は無論単に前節を繰り返すのではない。前節の議論は有用的労働の形態変換から「同種の労働」(人間的労働)が導かれる反省論であった。本節ではその反省論を踏まえ、二商品が同一性と区別において把握される反省規定論が説かれる。すなわち前節を経て労働は既に人間的労働と把握されており、従って労働の反省規定として同一性を表現する命題は「人間的労働は人間的労働である」でなければならない。

区別は自己内反省をもっている否定態であり - 「AはBではない」という否定態は「Aは、Aであって、Bではない」であるから、自己内反省をもっている - 、同一的な言葉 identische Sprache(「AはAである」)によって表わされるところの無 Nichts(否定)であって、同一性そのもの Identität selbst の本質的な契機である - 「Aは非Aではない」は「Aは(、非Aではなくて、)Aである」の本質的な契機である - (p.44)。この同一性は同時に自己自身の否定態として自己を規定すると共に、また区別から区別されている。

直ちに量的関係の考察に入る議論で「見落とされているのは」、区別(「異なった物の大きさ」)が自己内反省(「人間的労働は人間的労働である」すなわち「同じ単位への還元」)されてはじめて否定態(「量的に比較され得るもの」となることである。このとき区別は同一的な言葉(「同じ単位」)によって表わされるところの無(「同じ単位の異なる」諸表現)として同一性そのもの(「同じ単位」)の本質的な契機である。同一性(「同名の、同じ単位」)は同時に自己自身の否定態(「計量され得る」もの)として自己を規定すると共に、また区別(計量される「大きさ」)から区別されている。

(2) p.85 B 区別 1 絶対的区別の [1. 区別の本性] p.44~45

20 エレのリンネル = 1 着の上着 であろうと、= 20 着の上着 であろうと、= x 着の上着

であろうと、すなわち、一定分量のリンネルが多くの上着に値しようと少ない上着に値しようと、このような割合はどれも、リンネルと上着とは、価値の大きさとしては、同じ単位 *dieselbe Einheit* の諸表現であり、同じ性質の諸物 *Dinge von derselben Natur* であるということ、つねに含んでいる。リンネル=上着 が等式の基礎 *Grundlage* である。

同一性そのものの本質的契機たる区別 (A と非 A の区別) は、即且向自的な [それ自体で自立した] 区別・絶対的区別・本質の区別である (p.44)。それは外面的なものによる区別ではなく (A と非 A は「A は A である」において区別された)、自己へと関係する区別・従って単一な [単純な] 区別である。A と非 A との絶対的区別において、当の区別を形成するのは単純な非 *einfaches Nicht* である。それ故区別そのもの *Unterschied selbst* は単純 [単一] な概念である。二つのものが「...の点で *darin, das...*」互に区別されるというとき、「...の点で」とは同じ一つの見地において *in einer und derselben Rücksicht*、同一の規定根拠において *in demselben Bestimmungsgrunde*、という意味である。だからこの区別は反省の区別 *Unterschied der Reflexion* であって定有の他在 *Anderssein des Dasein* ではない。或る定有と他の定有とは相互外在的なもの *ausereinanderfallend* として措定されており、互いに対立的に規定された定有の各々はそれぞれ直接的な有をもっているが - 二商品リンネルと上着はそれぞれの使用価値において相互外在的である - 、これに対して本質の他者は即且向自的な他者であって、自己の外部に見出されるものとしての他者でなく、それ故単一な規定態それ自体 *einfache Bestimmtheit an sich* である - 二商品は簡単な (単一な) 価値形態において一つの価値関係にある - 。定有の領域においても、他在と規定態は単一な規定態・同一的な対立 *identischer Gegensatz* という性質であることが示された *sich erweisen*。しかしこの同一性は、或る規定態が他の規定態へと移行する運動として自己を示したにすぎない - 第一節六パラグラフに「或る特定の商品、例えば一クォーターの小麦は、x 量の靴墨、y 量の絹、z 量の金などと、要するに極めてさまざまな比率で他の商品と交換される」とあり、これは論理的に直接的比例 [正比例] として把握された。そこでは比の「単一な規定態」(上巻の二 p.187) たる指数は、単位 (規定態) と集合数 (他在) という「自分の区別をそれ自身のもとに *an ihm selbst* もつ」(同) $k = a/b$ の「同一的な対立」である。けれども指数はそれ自身「何らかの定量」(同) であるから増減する。そして一クォーターの小麦の交換価値である x 量の靴墨が、同じく交換価値である y 量の絹や z 量の金に置き換えられ得るのは、指数が増減して「或る規定態の他の規定態へと移行する運動として自己を示す」からであった (拙稿『商品の二要因』論の論理 p.11) - 。これに対して、ここ反省の領域において区別は反省した区別 *reflektierter Unterschied* として現われ *auftreten*、その本来的な相 *wie er an sich ist* 措定されている (p.45)。区別の「本来的な相」とは「区別が自己自身へと関係することによって (「区別は区別である」)、必然的にまた同一性へと関係している (「区別は区別である」は区別の同一性である)、そのような区別」(以文社版 p.311 訳者注) である - 反省の領域たる価値関係においては、等価形態にある上着は自己自身へと関係して「上着は上着である」から、「-

定分量のリンネルが多くの上着に値しようとなし、少ない上着に値しようとなし、リンネルと上着は「価値の大きさとして(の点で)」区別され、つまり「リンネル=上着」という同じ一つの見地・同一の規定根拠においてある。換言すれば「リンネル=上着」であり、だから「等式の基礎」たり得るのである - 。

(3) p.85~86 B 区別 1 絶対的区別の [2. 区別と同一性] の第一パラグラフ p.45

しかし、質的に等置された qualitativ gleichgesetzt 二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？ リンネルが、その「等価物(等置されるもの)」としての、またはそれと「交換され得るもの das Austauschbare」としての上着に対してもつ関連によって、である。この関係 Verhältnis の中では、上着は、価値の実存形態 Existenzform として、価値物 Wertding として、通用する。何故なら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じもの dasselbe wie die Leinwand だからである。他方では、リンネルそれ自身の価値存在 [固有の価値存在・固有のもの] das eigne Wertsein が現われてくる zum Vorschein kommen(実体とその自然形態から区別されて表現される)。すなわち、一つの自立的 selbstständig 表現を受け取る。何故なら、ただ価値としてのみ、リンネルは、等価値のものとしての、またはそれと交換し得るものとしての上着と関連しているからである。.....(後略)..... - マルクスは省略部分で、酪酸と蟻酸プロピルを例に同様の論理を繰り返している。上の引用中()で補った言葉はその内容を反映させたものである。 -

「質的に等置された二つの商品」は「同じ性質」(前パラグラフ)である。では「同じ性質」の二商品がその役割において区別され得るのは、どのようにしてか。

区別それ自体 Unterschied an sich - 「区別は区別である」 - は自己に関係している sich auf sich beziehend ところの区別として、それ自身の否定態・自己の自己自身からの区別である(p.45)。それ故区別は区別そのものではなくて、区別の他者である。けれども区別から区別されたものは同一性であるから、区別は区別そのものでありかつ同一性である。すなわち両者が一緒に [共同して] zusammen 区別を形成するのであるから、区別は全体(としての区別)であると共にその契機(としての区別)でもある。それ故単純な区別(前パラグラフ)は区別ではないということもできる。区別は同一性との関係 [関連] Beziehung auf die Identität においてはじめて区別であり、換言すれば、区別は区別として、同一性と(区別の)それへの関係そのもの Beziehung selbst とを含んでいるからである。

「リンネル=上着」は区別それ自体(区別の本来的な相)として自己の自己自身からの区別であり、だから「二つの商品は同じ役割を演じるのではない」。「リンネル=上着」は今区別の他者・同一性であるから、ここでは相対的価値形態にある「リンネルの価値だけが表現され」、契機と

しての区別すなわち等価形態にある上着は同一性とそれへの関係そのものを含んでいるところの「価値の実存形態・価値物として通用する」。

同一性がその全体であると共に契機でもあるのと同様に、区別も全体であると共にそれ自身の契機である (p.45)。 - このことは反省の本質的な性質であり、全ての活動性と自己運動との規定的な根源 bestimmter Urgrund aller Tätigkeit und Selbstbewegung である。 - すなわち同一性と区別は共に、反省として自己自身への否定的な関係である点で、自己を契機または被指定有たらしめる。

「リンネル=上着」は自己運動の規定的な根源であるから、ここにリンネルの自然形態から区別される(自己自身への否定的な関係である)「固有の価値存在」が指定される。つまりリンネルは価値として上着と関連する、価値関係の契機・被指定有(上着であるリンネル、従って実存する価値)である。

(4) p.86 B 区別 1 絶対的区別の [2. 区別と同一性] の第二パラグラフ p.45

我々が、価値としては諸商品は人間的労働の単なる凝固体 Gallert であると言えば、我々の分析は諸商品を価値抽象 Wertabstraktion に還元するけれども、商品にその自然形態とは異なる [差異される] 価値形態を与えはしない。 - 商品の他の商品に対する価値関係の中では im Wertverhältnis einer Ware zur andern そうではない。ここでは、その商品の価値性格 Wertcharakter が、他の商品に対するその商品(固有)の関連 ihre eigne Beziehung zu der andern Ware によって、現われ出るのである hervortreten。

「価値としては諸商品は人間的労働の単なる凝固体であると言えば、我々の分析は諸商品を価値抽象に還元する」ということが説かれたのは、直接には第一節十一パラグラフ及び第二節十一パラグラフにおいてである。けれどもそれによつては自然形態と区別される商品の価値形態は把握されないと云う。何故か。

区別は自身と同一性ととの統一として、それ自身において規定された an sich selbst bestimmt 区別である(反省規定としての区別)(p.45)。このとき区別は(定有の領域における)他者へと移行する運動 das Übergehen ではなく、自己の外部にある他者への関係ではない - これに対して「無関心的な差異性 Verschiedenheit に固執する」(「A 同一性」の註釈 1 p.37) ところの抽象 Abstraktion は、つまり相互外在的な或るものと他のものとの「区別を捨象する vom Unterschied abstrahieren ことで等置する運動 das Gleichsetzen」(同 p.36) である - 。区別はその他者(同一性)をそれ自身のもとに an ihm selbst もっている。同様に、また同一性は区別の規定にされることで、自己の他者としての区別の中に自己を喪失して sich verlieren しまったのではなく、その中で自己を維持しており、つまり区別の自己内反省であり区別の契機である - 「区別は区別である」という同一性が区別なのであるから、同一性は区別の自己内反省である - 。

諸商品を、その相互外在する使用価値の区別を捨象する(第二節十一パラグラフ)ことによって「人間的労働の単なる凝固体」として把握するのは、抽象(区別の捨象)によって諸商品を等置する運動である。そして商品の自然形態とはその使用価値の形態のことであるから(第三節 p.80)、抽象は「商品にその自然形態とは区別される価値形態を与えはしない」。区別が捨象されれば(抽象されれば)、区別のないところに区別されたものの把握はあり得ないからである。そうではなくて、商品の価値形態が与えられるのは「一商品の他の商品に対する価値関係の中」においてである。価値関係はそれ自身において規定された区別であり、そこではリンネルの「価値性格」(使用価値からの区別)がその他者をそれ自身のもとに(「他の商品と関連して」)もっている(「現われ出る」)からである。

(5) p.86~87 B区別の1絶対的区別 [3.差異性への移行] p.45~46

例えば、上着が、価値物として、リンネルに等置されることによって、上着に潜んでいる労働がリンネルに潜んでいる労働に等置される。ところで、確かに、上着をつくる裁縫労働は、リンネルをつくる織布労働とは種類の異なる[差異される種類の]具体的労働である。しかし、織布労働との等置は、裁縫労働を、両方の労働のなかの現実に等しいもの *das wirklich Gleiche* に、人間的労働という両方に共通な性格に、実際に *tatsächlich* 還元する。この回り道 *Umweg* を通ったうえで、織布労働も、それが価値を織り出す限りにおいては、裁縫労働から区別される特徴 *Unterscheidungsmerkmal* をもっていないこと、すなわち抽象的人間的労働であること、が語られるのである *gesagt*。種類の異なる諸商品の等価表現 *Aquivalenzausdruck* だけが - 種類の異なる諸商品に潜んでいる、種類の異なる、諸労働を、それに共通なもの *das Gemeinsame* に、人間的労働一般に、実際に還元することによって - 価値を形成する *wertbildend* 労働の独自の[特有の]性格 *spezifischer Charakter* を表わすのである *zum Vorschein bringen*。

前パラグラフで説いたことの例示を通して、本節では抽象的ではないところの現実的・実際の還元が説かれる。それ故「抽象的人間的労働」は前節での「抽象」ではない(この点後述するところがある(十パラグラフ))。

区別は同一性と区別という二つの契機をもっている(p.45)。かくして同一性と区別が区別(反省)されているのだから両者は被措定有であり、(反省)規定態 *Bestimmtheit* である。しかしこの被措定有においてはそれぞれが自己自身への関係 *Beziehung auf sich selbst* である。一方の同一性はそれ自身が直接的に自己内反省の契機である - 自己内反省「同一性は同一性である」の契機は同一性である - 。同様に、他方の区別も区別それ自体であり、反省した区別である - 反省した区別「区別は区別である」は自己内反省である - 。このように、区別がそれ自身自己内反省である二つの契機(「同

一性は同一性である」すなわち同一性と「区別は区別である」すなわち区別)をもつとき、区別は差異性 *Verschiedenheit* である。

価値関係、「例えば、上着が、価値物として、リンネルに等置されること」は区別であるから、同一性と区別という二契機をもち、「上着に潜んでいる労働(裁縫労働)とリンネルに潜んでいる労働(織布労働)」である。前者は「有用的労働である裁縫労働」として被指定有・規定態であり(拙稿『労働の二重性』の論理 p.28)、後者とは「種類の異なる具体的労働である」。しかし被指定有は自己自身(その本質)への関係であり、有用的労働の本質は「人間的労働」(第二節)であった。かくして「裁縫労働の織布労働との等置」(価値関係)は「裁縫労働を、両方の労働のなかの現実に等しいものに、人間的労働という両方に共通な性格に、実際に還元する」。この等値を「織布労働は裁縫労働である」と表わせば、織布労働は同一性の契機として「それが価値を織り出す限りにおいては、裁縫労働から区別される特徴をもっていない、すなわち抽象的人間的労働である」。これに対して裁縫労働は区別の契機として人間的労働から区別される有用的労働である。両者の区別は差異性であって、ここに有用的労働から区別される「価値を形成する労働の独自の性格」を価値関係が「表わすのである」。

(6) p.87~88 B 区別の2 差異性 [1. 差異性の本性] の第一パラグラフ p.46

もっとも、リンネルの価値を構成している *woraus der Wert der Leinwand bestehen* 労働の独自の [特有の] 性格を表現するだけでは十分ではない。流動状態にある *im flussigen Zustand* 人間的労働力、すなわち人間的労働は、価値を形成する *bilden* けれども、価値ではない。それは、凝固状態において、对象的形態において *in gegenstandlicher Form*、価値になる。リンネル価値を人間的労働の凝固体として表現するためには、リンネル価値は、リンネルそのもの *selbst* とは物的に異なっている [差異されている] *verschieden* と同時にリンネルと他の商品とに共通な *gemeinsam* 或る [一つの] 「対象性」*jeine Gegenstandlichkeit* として表現されなければならない。この課題はすでに解決されている。

価値形態論とは言うまでもなく価値形態についての論であり、その価値形態は既に触れたように、自然形態に対比されるところの、商品が超自然的・社会的に採る形態、本パラグラフに所謂人間的労働力の「对象的形態」である。その価値対象性の表現形態の把握が始まる本パラグラフは、この意味で第三節本論の開始と見ることができようが、マルクスが説くように - 「価値形態……は、極めて没内容的であり簡単である。とは言え、人間精神は二千年以上も前から、これを解明しようとして果さなかったのであるが。」(p.8 初版への序言) - 、その叙述は易しいものではない。

同一性は、それ自身において *an ihr selbst* 差異性に崩壊する *in Verschiedenheit zerfallen* (p.46)

－ 前パラグラフで「それ自身自己内反省である二つの契機をもつ」区別は差異性であると説かれた。その区別の二契機は同一性と区別であり、それぞれ「同一性は同一性である」「区別は区別である」の自己内反省（同一性）であった。それ故の本パラグラフ冒頭「同一性は…」である。この同一性は煩瑣ではあるが『『同一性は同一性である』は『区別は区別である』である』と表わすことができる。なお「崩壊する」ということは既に「1 価値表現の両極」の四パラグラフにも見られたが、成の止揚に関する叙述は最も理解しやすい例を提供する。「有と無とは成の中では単に消失するものとして als Verschwindende あるにすぎないが、しかし成そのもの das Werden als solches も有と無との区別 Unterschiedenheit があることよってのみある。だから有と無との消失する運動 das Verschwinden は成の消失する運動であり、或いは消失する運動そのものの消失する運動である。つまり、成は支柱のない動揺であるが、この動揺は一個の静止的な結果へと崩壊する in ein ruhiges Resultat zusammensinken」(上巻の一 p.113)。有 同一性、無 区別、成そのもの 同一性それ自体と対照させれば、成が静止的な結果に崩壊したと同様に、同一性が崩壊して静止的な(区別する運動の運動性格を失った)差異性の生じたことが理解されよう。ただし成の崩壊が zusammen (合一して) -sinken なのに対し、また区別が崩壊する 1 の四パラグラフでは zusammen-fallen であるのに対し、同一性の崩壊は zer (分割して) -fallen である。このことの意味が次に説かれる。－。というのは、同一性(『『同一性は同一性である』は『区別は区別である』である』)は自己自身における絶対的区別として自己を自己の否定的なもの das Negative として措定し、しかもこの同一性の二契機・同一性そのもの Identität selbst(「同一性は同一性である」)とその否定的なもの(「区別は区別である」)とはそれぞれ自己内反省であり、自己同一的 identisch mit sich だからである。換言すれば、同一性はその否定する運動 das Negieren を直接的に自ら止揚し、その規定において自己内反省しているからである。－ 同一性はその否定する運動「区別は区別である」において自己内反省としてある。そのとき区別は同一性である故止揚されている。－。

価値関係が「リンネルの価値を構成している労働(人間的労働)の独自な性格を表現する」と有用的労働と人間的労働は差異性であるから、崩壊する同一性は『『有用的労働は有用的労働である』は『人間的労働は人間的労働である』である』がそれである。つまり有用的労働は自己を人間的労働(自己の否定的なもの)として措定し後者においてあるから、今労働は区別が止揚されて人間的労働であり、価値を形成する。

区別されたもの das Unterschiedene (同一性そのものと否定的なもの)は相互に無関心的に gleichgültig 差異されたもの das Verschiedene として存立する[成り立っている]bestehen。－ 成が崩壊した結果は「静止的単一態となった、有と無との統一」(上巻の一 p.114)であるが、同一性の二契機がそれぞれ自己内反省である差異性においては、静止的結果は相互に無関心的な差異されたもの、「同一性は同一性である」と「区別は区別である」とである。－。というのは、区別されたものは自己同一的であり、すなわち(「同一性は同一性である」・「区別は区別である」という)同一性が、その区別されたものの地盤と要素[境地]Boden und Element とを形成している ausmachen。言い換えると、差異されたものは、正にその反対のもの Gegenteil・すなわち同一性においてのみ差異されたものである。

リンネル価値を形成する人間的労働は区別されたもの・無関心的に差異されたものであるから、その運動性格は失われて凝固体である。その地盤と本領〔境地〕はその反対のものすなわち同一性であるから、リンネル価値は「リンネルと他の商品とに共通な或る対象性として表現される」。

(7) p.88 B区別の2差異性〔1.差異性の本性〕の第二パラグラフ p.46

リンネルの価値関係の中で、上着が、リンネルに質的に等しいもの〔質的に同等なもの〕 das qualitativ Gleiches として、同じ性質をもつ物として、通用する〔妥当する〕 gelten のは、上着が一つの価値だからである。だから、上着は、ここでは、価値がそれにおいて現われる物として、または手でつかめるその自然形態で価値を表わす物として、通用する。ところで、上着は、上着商品の身体は、確かに一つの単なる使用価値である。上着が価値を表現していないのは、リンネルの任意の一片が価値を表現していないのと同じである。このことは、ただ、上着はリンネルに対する価値関係の内部ではその外部でより多くの意味をもつということを示すだけである。ちょうど、多くの人間は金モールで飾られた上着の中ではその外でよりも多くの意味をもつように。

差異性は反省の〔領域における〕他在そのもの Anderssein als solches - 「同一性においてのみ差異されたもの」(前パラグラフ) - を形成する (p.46)。定有の他者は直接的な有をその根拠 Grund としていて、否定的なものはこの有の中に(非有として)成り立っている。ところが反省の場合には、自己との同一性・すなわち反省した直接態 reflektierte Unmittelbarkeit が否定的なものの成り立つ運動 das Bestehen des Negativen と、その否定的なものの無関心態 Gleichgültigkeit とを形成するのである。

「リンネルの価値関係」(差異性)は反省の他在そのものを形成し、だから上着は「一つの価値」すなわち「リンネルに質的に等しいものとして、同じ性質をもつ物として、通用」し(「同一性においてのみ差異されたもの」として反省され)、「価値がそれにおいて現われる物」・「手でつかめるその自然形態で価値を表わす物」(他在そのもの)を形成する。「ところで、上着商品の身体は、確かに一つの単なる使用価値」すなわち定有であるから、その他者・否定的なもの(価値)はこの有(使用価値)の中に(非有として)成り立っている(「上着(使用価値)が(上着)価値を表現していない」)。ところが反省の場合には(「価値関係の内部では」、上着の身体(自然形態)は反省した直接態(等価形態)として、否定的なもの(価値)の成り立つ運動と、その否定的なものの無関心態とを形成するのである(「金モールで飾られた上着」は誰がそれを着ようと当の人物に無関心なままその人を立派に見せるように、上着はその使用価値に無関心に価値を表現する)。

(8) p. 88 ~ 89 B 区別の 2 差異性 [1. 差異性の本性] の第三パラグラフ p. 46 ~ 47

上着の生産においては、裁縫労働という形態のもとに、人間的労働が実際に支出された。従って、上着の中には人間的労働が堆積されている *aufgehaut*。この面からすれば、上着は「価値の担い手」である。もっとも、上着のこの属性そのもの *Eigenschaft selbst* は、上着がどんなにすり切れてもその糸目から透けて見える *durchblicken* わけではないが。そして、リンネルの価値関係の中では、上着はただこの面だけから、それ故、体化された価値 *verkörperter Wert* としてのみ、価値体としてのみ、通用する。ボタンをかけた [よそよそしい] 上着の外観 *Erscheinung* にもかかわらず、リンネルは、上着のうちに同族のうらわしい価値魂を見てとったのである。しかし、上着がリンネルに対して価値を表わすことは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態をとることなしには、できないことである。ちょうど、個人 A が個人 B に対して陛下に対する態度をとることは、同時に A にとって陛下が B という肉体的姿態 *Leibesgestalt* をとること、従って、顔つき、髪の毛、その他多くのものが、国王の交替のたびに替わる *mit dem jedesmaligen Landesvater wechseln* ことなしには、できないように。

区別の契機は同一性と区別そのものとである (p. 46)。ところが、この両者は自己自身へ反省したもの、自己に関係するものとして差異されたものである。この意味で、両者は同一性の規定の中にあるものとして単に自己への関係である。すなわち同一性は区別に関係せず、また区別は同一性に関係しない。このように、これらの二契機の各々が、ただ自己にのみ関係する故に、両者は互に規定し合うことはない - 「同一性は、区別ではなくて、同一性である」の「区別ではない」という否定の契機が止揚されている (以文社版訳者注 p. 313)、区別についても同様 - 。両者はかくして、それ自身において区別されているのではないから、区別は両者にとって外面的である。故に、この互に差異されたものは同一性と区別として相互に関わり合うのではなく、ただ相互に無関心で、またそれぞれの規定態に無関心であるところの差異されたもの一般 *das Verschiedene überhaupt* として関わり合っている *sich verhalten*。

上着はその「手でつかめるその自然形態で価値を表わす物」(前パラグラフ)であるから、「上着の生産(区別)においては、裁縫労働(同一性)という形態のもとに、人間的労働(区別そのもの)が実際に支出された」。そこで人間的労働は差異されたものとしてその運動性格を失っており(流動状態になく)、「上着の中には人間的労働が堆積されている」。裁縫労働と人間的労働はそれぞれ単に自己への関係であるから、両者は相互に関係しない(「価値の担い手」という「上着のこの属性そのものは、上着(身体)がどんなにすり切れてもその糸目から透けて見えるわけではない」)。「そして、リンネルの価値関係の中では」、リンネルと上着の二契機が互に規定し合うことはないから、上着は(リン

ネルと有的に関わって使用価値であることはなく)ただ「体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、通用する」。このように、リンネルと上着はそれ自身において区別されているのではないから区別は外面的であり、だから「ボタンをかけた上着の外観にもかわらず [外面的な区別を超えて]、リンネルは、上着のうちに同族のうるわしい価値魂を見てとったのである」。ところで顔(外観)をもたない者が国王になることはできないが(顔の見えない国王も顔そのものはもっている)、しかしどんな顔つきであるかは問われない。或る人物(商品)が国王であること(価値)とその顔つき(その価値が採る自然形態)とは相互に無関心な差異されたもの一般である。

(9) p.89 B 区別の2 差異性 [2. 差異性の構造] の第一パラグラフ p.47

こうして、上着がリンネルの等価物となる価値関係の中では、上着形態が価値形態として通用する。それ故、商品リンネルの価値が商品上着の身体で表現され、一商品の価値が他の商品の使用価値で表現されるのである。使用価値としては、リンネルは、上着とは感性的に異なる [差異された] verschieden 物であるが、価値としては、リンネルは、「上着に等しいもの [上着に同等なもの] das Rockgleiche」であり、従って、上着のように見える。このようにして、リンネルは、その自然形態とは異なる [差異された] 価値形態を受け取る。リンネルの価値存在が上着とのその同等性 Gleichheit において(外に)現われる erscheinen のは、キリスト教徒の羊的性質が神の仔羊 [キリスト] とのその同等性において現われるのと同じである。

区別の(相互)無関心態としての差異性においては、反省は一般に自己に対して外面的となっている (p.47)。区別は単に一つの被測定有にすぎない(「AはBではない」においてAは「Bではない(限り)A」である)。或いは(区別する運動の運動性格が失われて)止揚された区別としてあるにすぎない。けれども区別は、同時にそれ自身全体的な(外的)反省でもある(区別は契機としての区別であると同時に全体としての契機であった(三パラグラフ))。

「上着がリンネルの等価物となる価値関係」は差異性であるから反省は外面的である(「価値は身体である」。区別は単に一つの被測定有(身体である価値)であり、従って「上着(の自然)形態が価値形態として通用する」。ただし価値関係(全体としての区別)は全体的な外的反省であるから、相互外在する「一商品の価値が他の商品の使用価値で表現される」。

さらに詳しく見れば、同一性と区別との両者は、先に規定されたように、それぞれ反省である。その各々は自己自身とその他者との統一である。各々がそれぞれ全体である。しかしそのことによって、単に同一性であるまたは単に区別であるという規定態は一つの止揚されたもの ein Aufgehobenes である - 「同一性は同一性である」と「区別は区別である」が一つの止揚されたものである - 。

この両者の規定態は自己内反省である点で同時にまた有としてでなく（区別が止揚された）否定としてのみあるのだから、両者は（有の規定態たる）質ではない - 定有の規定態（質）は一方の規定（実在性 Realität）と他方の規定（否定）という形で分けて見られるが（上巻の一 p.118）、このうち実在性は「他と区別されて存在（有）的なものと見られる als seiende gelten」（上巻の一 p.121）ことであるから、自己内反省が有としてあることはない - 。それ故に、ここには自己内反省そのもの（同一性）と、（運動性格をもたない）否定としての規定態すなわち被指定有という二重のもの das Gedoppelte が存在する。被指定有は自己に対して外面的な反省である。それは（運動性格を失って）否定としての否定 Negation als Negation である。このことによって即自的（潜在的）には確かに自己へと関係する否定、自己内反省ではあるが、しかしただ即自的にそうであるにすぎない。故に、被指定有は一つの外的なもの ein Auserliches としての自己への関係である。

「（定有である）使用価値としては、リンネルは、上着とは感性的に差異された物（有）であるが、（本質態である）価値としては」リンネルの規定態（相対的価値形態）は自己内反省である点で同時にまた有としてでなく否定としてのみあり、つまり質（使用価値）として把握されないリンネルは「上着に等しいものである」。かくしてリンネルは二重のものとして存在し、だから「上着のように見える」。すなわち自己に対して外面的な反省・被指定有（上着であるリンネル）として、「リンネルは、その自然形態とは異なる価値形態を受け取る」。それは即自的な自己内反省であって、「リンネルの価値存在（本質）が上着（一つの外的なもの）とのその同等性において（外に）現われる」。

(10) p.89 ~ 90 B 区別の 2 差異性 [2. 差異性の構造] の第二パラグラフ p.47 ~ 48

上述のように、商品価値の分析がさきに我々に語ったいっさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶ in Umgang treten やいなや、リンネル自身 selbst が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語 Warensprache で、その思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的的属性においてリンネル自身の eigen 価値を形成するということを行うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、従って価値である限り、上着はリンネルと同じ労働から成り立っている aus derselben Arbeit bestehen とする。リンネルの高尚な価値対象性は糊でござごわしたリンネルの身体とは異なっている [差異されている] ということを行うために、リンネルは、価値は上着に見え aussehen、従って、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。ついでに言えば、商品語も、ヘブライ語のほかに、もっと多くの、或いはより正確な、或いはより不正確な、方言をもっている。例えばドイツ語の Wertsein は、ロマンス語系の動詞、valere, valer, valoir に比べて、商品 B の商品 A との等置が、商品 A 自身の価値表現であることを言い表わすには不適切である。Paris vaut bien une messe!

即自的な自己内反省（一つの外的なものとしての自己への関係）において、即自的な反省〔反省それ自体〕 Reflexion an sich と外的反省とは、区別の契機である同一性と区別がそれへと自己を措定するところの二つの規定である die zwei Bestimmungen, in die sich die Momente setzen (p.47) - 区別の二契機である同一性と区別が、自己同一的・相互無関心の同一性と区別として措定されたのである。次パラグラフでは後の同一性が同等性、区別が不等性と呼び替えられる。従って即自的な反省は同等性、外的反省は不等性である。なお即自的な反省とはこれまで自己内反省と呼ばれたものが、即自的に自己内反省であるにすぎないことを理由に呼び替えられたもの - 。両者（同一性と区別）は、今や自己を（同一性・区別と）規定してしまった限りでは、このような二契機そのもの（契機としての契機）である。

「上述の商品価値の分析」とは第一節を指す。そこで外的反省によって für uns に明かされたことが、「リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語る」、つまりリンネルがその価値関係において自己を措定して für es に明らかになるのである。ただリンネルは契機そのものであるから向自的であり、それ故「自分だけに通じる言葉で（自分だけに向けた言葉で）」語る。つまり即且向自的なのではない。

即自的な反省は同一性（「同一性は同一性である」）であるが、それは区別に対して無関心であると規定されている、すなわち（「同一性は、区別ではなくて、同一性である」から）区別を全然もたないのではないが、区別（つまり「区別は区別である」の同一性）に対して自己同一的なものとして振舞う sich verhalten と、規定されている（p.48）。即自的な反省は（区別に対する無関心であるから）差異性である。

今価値関係は即自的な反省（労働）として把握され、それは差異性・区別に対する無関心な同一性だから、「労働は人間的労働という抽象的属性（抽象的人間労働）において」把握される - 「その抽象態における差異性そのものは差し当たり同等性と不等性に対して無関心的である」（p.53 註釈） - 。つまり価値関係においては（「上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、従って価値である限り」）、「リンネル自身の価値を形成する」抽象的人間的労働は（織布労働・裁縫労働の）区別を全然もたないのではないが、区別に対して自己同一的なものとして振舞う（「上着はリンネルと同じ労働から成り立っている」）。

同一性は自己内反省（区別に対する自己同一的な振舞）した結果、本来的に二契機（それぞれ）の自己への一つの反省であるが、そのような同一性が存在している（p.48）。つまり二契機は共に自己内反省である。同一性は二契機の一つの反省であるが、この反省はそれ自身 an ihr 区別を単に無関心的な区別としてもっているにすぎず、従って差異性一般である。

価値関係において、相対的価値形態（同一性）にあるリンネルは二契機の自己への一つの反省であり（「リンネルの高尚な価値対象性（本質）は糊でごわごわしたリンネルの身体（外観）とは異なって」、一つの反省において把握される）、だから「価値は（その外観の異なりを超えて）上着に見える」。区別は単に無関心的な区別であるから、それ故「リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つ」である。

以上の即自的反省に対して、外的反省の方は（共に自己内反省である）両契機の規定的な区別であって絶対的な（ただ一つの）自己内反省としてあるのではなく、むしろ即自的反省〔自体的である反省〕die an sich seiende Reflexion（絶対的な自己内反省）がそれに対して無関心であるような規定としてある（p.48） - 同一性と区別は今共に同一性であるが、ただし区別されてもいて、その区別を規定するのは区別である。けれども（同一性と区別が共にそれであるところの）同一性はこの区別に対する無関心である（だからこそ同一性と区別の同一性である） - 。かくしてこの区別の二契機、同一性と区別そのものは（措定されたが）外面的に措定された、即且向自的ではない二規定である。

「リンネル価値は上着に見え、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つである」なら、リンネル価値が例えば高級車に見えても構わない。リンネルの価値関係においては、等価値物が何であるか（外的反省）は即自的反省がそれに対して無関心的であるような規定としてあるからである。もっとも高級車との交換が上着との交換に比べれば表象しにくいように、リンネル価値を表現する商品としての適不適はあるだろうが（ただしこれはほんのついでの話であって、本質的なことではない）。

(11) p.90 B 区別の 2 差異性 [2. 差異性の構造] の第三パラグラフ p.48

従って、価値関係の媒介によって *vermitteltst des Wertverhältnisses*、商品 B の自然形態が商品 A の価値形態となる。言い換えれば、商品 B の身体が商品 A の価値鏡 *Wertspiegel* となる。商品 A が価値体としての、人間的労働の物質化 *Materiatur* としての、商品 B に関連する *sich beziehen* ことによって、商品 A は、使用価値 B を、それ自身の価値表現の材料にする。商品 A の価値は、このように商品 B の使用価値で表現されて、相対的価値という形態をもつ *besitzen*。

それ故、この（差異されたものの）外面的同一性は同等性 *Gleichheit* であり、外面的区別は不等性 *Ungleichheit* である（p.48）。 - 同等性は確かに同一性ではあるが、しかしただ被措定有としての同一性にすぎず、即且向自的ではない〔完全に自立的ではない〕同一性である。 - 同様に不等性は区別ではあるが、外面的区別としての区別であって、即且向自的に〔完全に自立的に〕不等なものそのもの *das Ungleiche selbst* の区別なのではない。或るものが他の或るものに同等かそれとも不等か *gleich oder nicht* ということは、これら二つの或るものの何れにも関わる *angehen* ことではない。両者は各々ただ自己にのみ関係して *nur auf sich beziehen*、即且向自的に〔それ自身完全に自立的に〕それがあるところのものである。同等性ならびに不等性としての同一性であるか非同一性であるかは、この二つの或るものの外にあるところの第三者の観点 *Rucksicht* によって決まる。

さてマルクスは次のように注している。

見方によっては、人間も商品と同じである。人間は、鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、始めは先ず他の人間に自分自身を映してみる *sich bespiegeln*。人間ペテロは、自分と同等のもの *seingleiches* としての人間パウロとの関連 *Beziehung* を通してはじめて人間としての自分自身に関連する。だが、それと共に、ペテロにとってはパウロの全体 *mit Haut und Haar* が、そのパウロ的肉体のままで、人間という種属の現象形態として通用する *gelten*。

「人間ペテロは、彼と同等のものとしての人間パウロとの関連を通してはじめて人間としての自分自身に関連する」、つまりペテロが人間であるのは被指定有「パウロ（と同等）であるペテロ」としてであり、このときペテロは人間であること（人間という性質）においてパウロと同等なものであるとして指定されている。けれどもパウロがその肉体（人間であることの物質化）において人間であるのと同様、ペテロもまたペテロの肉体において人間である。そして両者の肉体は不等であるから、ペテロとパウロはその肉体の不等においてのみ人間として同等であり、逆に同等な人間性においてのみ肉体的不等である（同等性は即且向自的同一性でなく、また不等性は即且向自的な区別ではない）。

ペテロがパウロと（人間性において）同等であるか（肉体において）不等であるかは、ペテロ・パウロの何れにも関わらず、両者を比較する第三者の観点によって決まる（たといペテロ自身がパウロを鏡に自己認識するにせよ、彼は第三者として、時にパウロと同等な人間性を、時にパウロと不等な肉体を、自分に認める）。両者はただ自己にのみ関係しておいる。それ故ペテロの鏡はパウロでなくともよい。ユダが鏡になれば、ユダ的肉体がペテロの人間性を表現する材料である。つまりペテロの人間性はさまざまな肉体で表現され、その形態は相対的である。

b 相対的価値形態の量的規定性

(1) p.91 B 区別の 2 差異性 [3. 差異性の分析と移行] の第一パラグラフ p.48~49

その価値が表現されるべき商品は、どれも、与えられた分量 [定量] *gegebenes Quantum* の或る使用対象 - 五シェッフェルの小麦、一〇〇ポンドのコーヒーなど - である。この与えられた商品分量は、一定分量の人間の労働を含んでいる。従って、価値形態は、単に価値一般だけではなく、量的に規定された価値、すなわち価値の大きさをも表現しなければならない。それ故、商品 B に対する商品 A の、上着に対するリンネルの、価値関係においては、上着という商品種類は、単に価値体一般として、リンネルに質的に等置されるだけではなく、一定分量のリンネル、例えば二〇エレのリンネルに対して、一定分量の価値体または等価物、例えば一着の上着が等置されるのである。

「a 相対的価値形態の内実」を終え、棚上げされていた量的側面が考察される。ポイントは価値関係が外的反省だということにある（それ故、外的反省が規定的になるものとしての外的反省を経て、規定的反省に到った前節十三パラグラフ以降の論理が参考になる）。

第三者の観点による外的反省は差異されたものを同等性と不等性とに關係させる *beziehen* (p.48)。この關係すなわち比較する運動 *das Vergleichen* は同等性から不等性へ、また不等性から同等性へとあちらこちらへ揺れ動く。しかしこの同等性と不等性との揺れ動いて關係する運動 *heruber- und hinubergehende Beziehen* は、これらの規定そのもの（同等性・不等性）にとっては外面的である。またこの両規定は相互關係せず *nicht aufeinander*、各々は向自的に [切り離されて] *für sich* ただ或る第三者 *ein Drittes* に關係付けられる。各々は、このような交替 *Abwechslung* に際して直接に切り離されて現われる *hervortreten*。

「その価値が表現されるべき商品」は価値関係に入ることによって差異されたものであり、従って「与えられた分量の或る使用対象（質）」（差異されたもの）である。価値関係は外的反省として差異されたもの（二商品）を同等性と不等性とに關係させる。すなわち差異されたものを比較するこの関係の中で、「与えられた商品分量は、一定分量の人間の労働を含んでいる」ことが表現される。ところで内在的・質的ではなく外面的であるのは量であり、それが分離的なものとして第三者において統一しているのは定量であるから - 定量の原理たる一者は「先ず第一に……統一である。第二に、それは分離的である」（上巻の二 p.29 第二章定量） - 、比較する運動すなわち価値関係において、「価値形態は、単に価値一般（質）だけではなく、量的に規定された価値、すなわち価値の大きさをも表現しなければならない」。

外的反省は自己自身に対して外面的である (p.49) - A の「(B である) A」と規定されることへの無關心 - 。規定的な区別 (A と「 B (である A)」) は否定された絶対的区別である（規定することは否定することであり、絶対的区別は自己へと關係する区別であった (a の二パラグラフ)）。それは単一ではなく（同じく絶対的区別は単一な区別であった (同)）、自己内反省ではなくて、自己内反省を自己の外にもつ。だから、その（反省の）二契機は互に分離しており [別々になっており] *auseinander fallen*、互に外面的な契機として、二契機に対立するところの *gegenüberstehend* (すなわち外なる) 自己内反省に關係するのである。

「商品 B に対する商品 A の価値関係」は外的反省であるから、自己自身（商品 A）に対して外面的である。そこで商品 A は自己内反省を自己の外にもち、すなわちその二契機（「与えられた分量の或る使用対象」と「一定分量の人間の労働」）は互に分離しており、両者に対立的に關係する（等置される）ところの自己内反省（「一定分量の価値体または等価物」）において反省している。

(2) p.91~92 B区別の2差異性[3.差異性の分析と移行]の第二パラグラフ p.49

「20 エレのリンネル = 1 着の上着 すなわち二〇エレのリンネルは一着の上着に値する」という等式的前提にあるのは、一着の上着には二〇エレのリンネルに潜んでいるのと全く同じ量の価値実体が潜んでいること、すなわち、両方の商品分量は等しい[同等な]量の労働または等しい[同等な]大きさの労働時間を費やさせることである。ところが、二〇エレのリンネルまたは一着の上着の生産に必要な労働時間は、織布労働または裁縫労働の生産力が変動するたびに mit jedem Wechsel in der Produktivkraft、変動する。そこで、このような変動が価値の大きさの相対的表現に与える影響について立ち入って研究しなければならない。

この(自己内反省を自分の外にもつ)自己疎外的な反省 sich entfremdete Reflexion においては、同等性と不等性とは相互に対して自ら関係付けられていないものとして als gegeneinander selbst unbezogene 現われる hervorkommen (p.49)。そこで、この反省は両者を「...の限りにおいて Insofern」、「...の面では Seiten」、「...観点 Rucksichten では」ということによって、同一のもの ein und dasselbe に関係させるが、その限りまた両者を分離している trennen(同一のものが或る面で同等・別の面で不等なのだが、その或る面での同等・別の面での不等は、二つの面の相互無關心故、分離している)。同等性と不等性の両規定がそれへと関係付けられているところの同一のものが互に差異されたもの(或る面で同等なものとは別の面で不等なものとの分離)なのであるが、この差異されたものは、従って、一面から見れば互に同等であり、他面から見れば互に不等である。また、それらが同等である限りにおいては、それらは不等ではない。すなわち同等性は、ただ自己にのみ関係し、また同様に不等性は単に不等性であるにすぎない。

等式「20 エレのリンネル = 1 着の上着」は自己疎外的な反省であるから、同等性(「等しい量の労働または等しい大きさの労働時間」と不等性(「両方の商品分量」と)とは相互に関係付けられていない。ここでは「一着の上着には二〇エレのリンネルに潜んでいるのと全く同じ量の価値実体が潜んでいること」を「前提」にして(その限りにおいて)、同等性と不等性が同一のもの(「生産力」)に関係している。けれども「織布労働または裁縫労働の生産力は変動する」から、換言すれば生産力は互に差異されたものであるから、一面から見れば織布労働の生産力が変動し(差異されたものが互に同等である面)、他面から見れば裁縫労働の生産力が変動して(互に不等である面)、二つの労働の生産力変動が相互に無關心なものとしてある(同等性と不等性の分離)。「そこで、このような変動が価値の大きさの相対的表現に与える影響について立ち入って研究しなければならない」。

(3)(4)(5) p.92~93 B区別の2差異性 [3.差異性の分析と移行] の第三パラ
グラフ p.49~50

リンネルの価値は変動するが、上着価値は不変のままである場合。例えば、亜麻のとれる土地がますますやせた結果、リンネルの生産に必要な労働が二倍になるとすれば、リンネルの価値は二倍になる。今や一着の上着は二十エレのリンネルの半分の労働時間を含むにすぎないから、20 エレのリンネル= 1 着の上着 の代りに、20 エレのリンネル= 2 着の上着 となるであろう。これに対して、例えば織機の改良によって、リンネルの生産に必要な労働時間が半分に減少すれば、リンネル価値は半分に低下する。それに応じて、今や、20 エレのリンネル= 1/2 着の上着 となる。従って、商品Aの相対的価値、すなわち商品Bで表現される商品Aの価値は、商品Bの価値が不変のままでも、商品Aの価値に正比例して、上昇または低下する。

リンネルの価値は不変のままであるが、上着価値が変動する場合。こうした事情の下で、例えば羊毛の刈り取りが思わしくないために、上着の生産に必要な労働時間が二倍になれば、20 エレのリンネル= 1 着の上着 の代りに、今や、20 エレのリンネル= 1/2 着の上着 となるであろう。これに反して、上着の価値が半分に減少すれば、20 エレのリンネル= 2 着の上着 となるであろう。だから、商品Aの価値が不変のままでも、商品Aの相対的な、商品Bで表現される価値は、Bの価値変動に反比例して、低下または上昇する。

及び の下でのさまざまな場合を比較してみると、相対的価値の大きさの同じ変動が正反対の原因 *ganz entgegengesetzte Ursachen* から生じ得ることが分かる。実際、20 エレのリンネル= 1 着の上着 は、(一)リンネルの価値が二倍になっても、上着の価値が半分に減少しても、20 エレのリンネル= 2 着の上着 という等式になり、また、(二)リンネルの価値が半分に低下しても、上着の価値が二倍に上昇しても、20 エレのリンネル= 1/2 着の上着 という等式になるのである。

けれども、このような両者(同等性・不等性)相互の分離 *Trennung* によって、両者はただ止揚されるだけである(p.49)。矛盾と解消 *Widerspruch und Auflosung* とを両者から除くはずのもの、すなわち或るものは或る観点においては他のものと同等であるが、しかし他の観点においては不等であるということ、- この同等性と不等性との隔離する運動 *das Auseinanderhalten* は、むしろその破壊 *Zerstörung* なのである。何故なら、同等性と不等性との両者は区別の二規定だからである。言い換えれば、両者は、一方は他方でないところのものであるというような相互的關係なのである。同等は不等ではなく、また不等は同等ではない(p.50)。両者は本質的にこのような関係をもっていて、この関係を離れては何らの意義 *Bedeutung* をもたない。各自は区別の二規

定として、自己の他者と区別されるものとして、正にそれ自身なのである。しかし、両者相互の無関心態〔無関心であること〕のために同等性はただ自己にのみ関係するのであり、同様に不等性も向自的に〔それだけで孤立して〕für sich 固有の観点であり反省である。従って各自は自己自身に同等的である。両者は相互に何らの規定態をももたないのだから、区別は消滅している。言い換えると、各々は、こうして共に同等性にすぎない。

今同等性は織布労働の生産力の変動、不等性は裁縫労働の生産力の変動である。等式「20 エレのリンネル = 1 着の上着」は、()リンネル価値が二倍になり、上着価値が不変の場合、()リンネル価値が不変で、上着価値が半分に現象する場合、の双方の場合に等式「20 エレのリンネル = 2 着の上着」になる。だからここでは同等性と不等性の区別が消滅し、生産力の変動は共に同等性である。

(6) p.93 B 区別の 2 差異性 [3. 差異性の分析と移行] の第四パラグラフ p.50

リンネル及び上着の生産に必要な労働分量が、同時に同じ方向に、同じ比率で変動することもある。この場合には、これらの商品の価値がどんなに変動しようと、相変わらず、20 エレのリンネル = 1 着の上着 である。これらの商品の価値変動は、これらの商品を、価値が不変のままであった第三の商品と比較すれば、すぐに分かる *entdecken*。全ての商品の価値が、同時に、同じ比率で、上昇または低下すれば、それらの商品の相対的価値は不変のままであろう。これらの商品の現実の価値変動 *wirklicher Wertwechsel* は、同じ労働時間内に *in derselben Arbeitszeit*、今や一般的に、以前よりも多量か少量の商品分量が供給されるということから見てとれるであろう。

このために、この無関心な観点または外面的区別 *äusserlicher Unterschied* は自己自身を止揚するのであって、自己自身における自己の否定態である (p.50)。外面的区別は、比較する運動において (一・二パラグラフで第三のものと呼ばれた、あの) 比較するもの *das Vergleichende* に属するところの否定態である。比較するものは同等性から不等性に向かい、また不等性から同等性に戻る。こうして、一方を他方の中において消滅させるのであって、それは実際は両者の否定的統一である。

織布労働の生産力の変動 (同等性) と裁縫労働の生産力の変動 (不等性) の外面的区別が自己自身を止揚し、二労働の生産力変動は自己自身における自己の否定態であるから、「リンネル及び上着の生産に必要な労働分量が、同時に同じ方向に、同じ比率で変動する」。このとき価値関係の等式は「これらの商品の価値がどんなに変動しようと (不等性)、相変わらず (同等性)、20 エレのリンネル = 1 着の上着 である」から、同等性と不等性の外面的区別はこの等式 (比較するもの)

に属する否定態である。しかし「これらの商品の価値変動は、これらの商品を、価値が不変のままであった第三の商品（比較するもの）と比較すれば、すぐに分かる」。そこでは「これらの商品の価値変動」が「20 エレのリンネル = 1 着の上着」の不変によって表わされ（同等性から不等性に向かう）、等式の不変が価値変動の現われ（不等性から同等性に戻る）だからである。かくして二商品の価値変動と「20 エレのリンネル = 1 着の上着」の等式は否定的統一である。

この統一は最初は、両者の外部にある主観的な行為として、比較する運動並びに比較の両契機の彼岸にある。だが否定的統一は実際には同等性と不等性との本性 *Natur* である。両者の各々が自立的な観点 *selbständige Rücksicht* であって、この自立的な観点はむしろ同等性・不等性の（自分自身からの）区別態（否定態）・両者そのものを止揚する自己への関係である。

リンネル・上着を第三の商品と比較する運動は主観的な行為である（比較する運動が当の第三の商品との比較する運動である必然性はなく、だから否定的統一は比較する運動の彼岸にある）（p.50）。しかし「全ての商品の価値が、同時に、同じ比率で、上昇または低下すれば」、否定的統一は同等性と不等性との本性である（必然的な否定的統一）。このとき「それらの商品の相対的価値は不変（同等性）のまま」であるから同等性は自立的であり、「これらの商品の現実の価値変動（不等性）については、同じ労働時間内に、今や一般的に、以前よりも多量か少量の商品分量が供給される」のだから、不等性は自立的である。

（7）p.93～94 B 区別の 2 差異性 [3. 差異性の分析と移行] の第五パラグラフ
p.50～51

リンネル及び上着の生産にそれぞれ必要な労働時間、それ故これらの商品の価値が、同時に同じ方向に、しかし等しくない程度で変動するか、或いは反対の方向に変動する等々のことがあり得る。この種のありとあらゆる組み合わせが一商品の相対的価値に与える影響は、、、及び の場合を応用すれば、簡単に分かる。

そこで、この（同等性と不等性とが共に）外的反省の二契機であり、また自己自身に対して外面的であるという面からして、同等性と不等性とは両者の同等性の中に消滅する（p.50）。しかし、そのみでなく、更にまた、この両者の否定的統一が両者の中に措定されるのである。すなわち両者は即自有的な [自体的である] 反省を自己の外にもっている。言い換えると、両者は第三者の、すなわち両者自身とは異なるところの或る他者の同等性と不等性である。故に同等なもの *das Gleiche* は自己自身の同等なものではなく、また不等なもの *das Ungleiche* も自己自身の不等なものではなくて、自己に不等なもの *das Ungleiche* の不等なものとして、それ自身同等なものである。それ故に同等なもの *das Gleiche* と不等なもの *das Ungleiche* とは共に自己自身の不等なものである。従って両者の各々は次のよ

うな反省である (p. 51)。すなわち同等性は自己自身であって、また不等性であり、不等性も自己自身であって、また同等性であるという反省なのである。

リンネルと上着の価値変動の「ありとあらゆる組み合わせ」を考えれば、或る商品はその「相対的価値に与える影響」を当の相対的価値の外にもっている(即自有的な反省を自己の外にもっている)。言い換えると、相対的価値の不変(同等なもの)は自己自身の同等なものでなく、またその変動(不等なもの)も自己自身の不等なものではない。それ故に一商品の相対的価値の不変と変動は共に自己自身の不等なものである。すなわちその不変は不変であってまた変動であり、変動もまた変動であって不変である。これが価値関係の反省である。

(8) p. 94 B 区別の 2 差異性 [3. 差異性の分析と移行] の第六パラグラフ p. 51

こうして、価値の大きさの現実的変動は、価値の大きさの相対的表現または相対的価値の大きさには、明確にも余すところなしにも反映されはしない。一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変のままでも、変動し得る。一商品の相対的価値は、その商品の価値が変動しても、不変のままであり得る。そして、最後に、一商品の価値の大きさとこの価値の大きさの相対的表現とが同時に変動しても、この変動が一致する必要は少しもない。

同等性と不等性とは比較されたもの das Vergleiche または差異されたものに対して(その契機として)被指定有の面をなすものであり(同等・不等である差異されたもの)、比較されたものまたは差異されたものの方は同等性と不等性に対して即自有的な[自体的である]反省として規定されていた (p. 51) - 差異されたものは或る面で同等・別の面で不等でありながら、なお差異されたものとして自己同一的であった - 。ところが、この存在(比較されたものまたは差異されたもの)もこのようなものとして(被指定有に対して)規定されることによって、同時にその同等性と不等性に対する規定態を失うのである - 同等性は自己自身であってまた不等性であるところの同等性として自己同一性であり、不等性についても同じことが言える - 。すなわち外的反省の二規定である同等性と不等性こそ、今まで差異されたものそのものと見られたところの単なる即自有的反省(自己同一性)であって、差異されたものの全く無規定的な区別(「同等性は同等性である」の自己同一性と「不等性は不等性である」の自己同一性との区別)なのである。即自有的な反省は(無規定的な区別であるから)否定を欠くところの自己関係であり、抽象的な自己同一性であって、従って正に(自己自身の否定態たる)被指定有そのものである。 - それ故に、単に差異されたものは被指定有を通して否定的反省に移行する。差異されたものは単に指定された区別であり、従って何ら区別でないところの区別であり、それ故にまた自己自身における自己の否定である。この意味で、同等性と不等性そのもの、すなわち被指定有は、無関心態または即自有的反省を通して自己との否定的統一へ、言い換えると、それ自身において同

等性と不等性との区別であるような反省へ還帰する。そして自己の互に無関心的な二面が、またそのまま全くただ一つの否定的統一の契機にすぎないような差異性は、対立 *Gegensatz* である。

「相対的表現または相対的価値の大きさ」(相対的価値の同等性と不等性)は「価値の大きさ」(比較されたものまたは差異されたもの)に対して被測定有の面であるから、価値関係において一商品の相対的価値の不変が変動であってなお不変であり、また *vice versa* のとき、価値の大きさは相対的価値の大きさに対する規定態を失う(「明確にも余すところなしにも反映されはしない」)。すなわち「一商品の相対的価値」こそ、今まで「一商品の価値」と見られたところの単なる即自有的反省であって、商品価値の全く無規定的な区別なのである(「一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変のままでも、変動し得る」と「一商品の相対的価値は、その商品の価値が変動しても、不変のままであり得る」)。かくして価値関係は即自有的な反省・否定を欠くところの自己関係であり、抽象的な自己同一性であって、従って正に被測定有そのものである(「一商品の価値の大きさとこの価値の大きさの相対的表現とが同時に変動しても、この変動が一致する必要は少しもない」)。この価値関係が対立に移行して等価形態が考察される。(続)

編集後記

今月号の論考は、これまで本研究所・月報 (No.475 = 2003.1) に掲載されたものの続稿で、次稿につながる大著の一部という位置づけであります。そうした意味においては、前掲載論文の目次を、本号の冒頭に再掲しておくなどの配慮を編集部として提案しておけばよかったのではないかと反省しきりです。

学生時代に倫理学の講義のなかで、ヘーゲルからマルクスへの展開を学んだ際の知的興奮を思い起こしながら、本号の編集作業をすすめて参りました。本稿の次なる展開が楽しみです。

(J)

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 柴田弘捷

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
